

新型コロナウイルスの影響からの地域活性化に向けた飲食店群のトライアル

—大阪府門真市「かどま元気バル」の取組みからの示唆—

石原 肇 (近畿大学)

Keyword : 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)、行動変容、バルイベント、運営方法、大阪府門真市

【研究の背景および目的】

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の発生により、日本では感染拡大の防止の観点から新型インフルエンザ特措法に基づき 2020 年 4 月 8 日に緊急事態宣言が発令された。国民とあらゆる業界が、密閉、密集、密接のいわゆる三密を避けるための行動が求められた。同年 5 月 25 日に全都道府県で緊急事態宣言は解除されたものの、引き続き感染防止の観点からの行動が基本となっている¹⁾。

地域活性化を目的として全国各地で行われている飲み食べ歩きイベントであるバルイベント (長坂他、2012) は、1 日あるいは 2 日で実施される場合が多く、参加者がまちなかを回遊し、飲食店をはしごすることから賑わいを創出する。しかし、COVID-19 への感染防止の観点から、参加者の三密を回避する対応が求められる。筆者の知る限りでは、近畿地方で 2020 年 3~5 月に予定されていたバルイベントは、例えば「伊丹まちなかバル」「北船場 (バ) ル」等軒並み中止となった。このような状況下、大阪府門真市の「かどま元気バル」では、2020 年 11 月の開催に向けて、緊急事態宣言解除後の同年 6 月から直ぐにプレイベントを実施しつつ、様々な準備を進めている。これは、これまでの平時での運営方法の蓄積によるところが大きいと考えられる。そこで、本報告は、「かどま元気バル」を研究対象とし、緊急事態宣言解除後直ぐに活動できている背景を把握し、他の地域での取組みの参考に資することを目的とする²⁾。

【研究対象地域】

研究対象地域である門真市は大阪府の北東部にあり、市域は東西 4.9km、南北 4.3km で、面積は 12.30 km²である (図 1)。門真市は、もともと穀倉地帯であり、河内蓮根が特産物であったが、急激な都市化が進み、農村地帯から産業都市へと移行し、現在は東大阪工業地帯の重要な位置を占めている。市域の北部を京阪電鉄本線が走り西三荘・門真市・古川橋・大和田・萱島の各駅が、南部には大阪市営地下鉄長堀鶴見緑地線の門真南駅が、西部には大阪モノレールの門真市駅がそれぞれあり、比較的狭い市域に 7 つの駅がある (図 2)。各駅の一乗降客数をみると (表 1)、京阪本線の 5 駅および大阪モノレール門真市駅の各駅はいずれも 2 万人を越えている。大阪市営地下鉄の門真南駅だけ

が 1 万人を越えた程度となっている。幹線道路についてみると、市内中央部を東西に国道 163 号線が横断し、西部を南北に府道大阪中央環状線や近畿自動車道が縦断している。

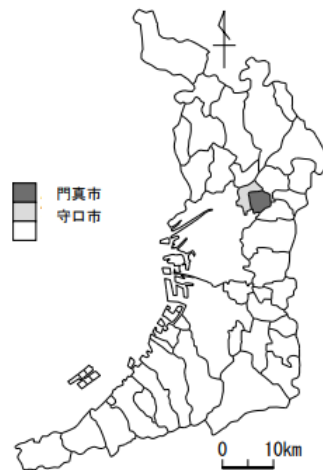


図 1 門真市および守口市の位置



図 2 門真市内各駅の位置と第 10 回かどま元気バル開催エリア
資料：第 10 回かどま元気バルマップブックから引用

表 1 門真市内駅の一乗降客数 (2018 年)

線名	駅名	一日乗降客数(人)
京阪本線	西三荘	22,834
	門真市	29,913
	古川橋	21,682
	大和田	21,675
	萱島	27,417
大阪モノレール	門真市	22,603
大阪市営地下鉄	門真南	11,256

資料：門真市統計書 (令和元 (2019) 年版) より作成

【研究方法】

研究方法は以下のとおりである。かどま元気バル実行委員会HPよりこれまでのバルマップブックを入手し、運営方法、参加店舗数等の情報を把握した。2020年7月28日に、運営方法のこれまでの変遷、2020年11月開催予定のバルイベントの本実施の考え方等について、かどま元気バル実行委員会へのヒアリングを行った。また、2020年6月、7月、8月開催のプレイベントの状況を、同年6月26日、7月4日、8月1日にそれぞれ把握した。なお、筆者は、「かどま元気バル」は門真市内の全地域を一つの実行委員会で運営していることに興味を持ち、どのような運営がなされているかを把握するため、2016年11月12日（第8回）および2019年7月2日（第10回）のイベント開催時に現地調査を実施している³⁾。これらの情報から、緊急事態宣言解除後直ぐに活動できている背景を把握し、その要因を考察する。

【結果および考察】

1 開催経過と運営方法の変遷

「かどま元気バル」の開催経過を表2に示す。「かどま元気バル」は第1回から現在に至るまで、飲食店主によって構成される飲食店元気塾のメンバーが主となり、かどま元気バル実行委員会が組織され運営されてきている。

第1回は2012年4月28日に参加飲食店20店舗で開催された。前実行委員長が、「伊丹まちなかバル」などの情報を収集し、試験的に実施するとの呼び掛けにより、西三荘エリアと門真エリア（門真市駅周辺）でチケット方式により開催している。

表2 「かどま元気バル」の開催経過

回	開催年月日	日数	店舗数	エリア数とエリア名		缶バッジ 販売数（個）	1店当たり 販売数（個）	バルメニュー 提供料金
1	2012.4.28	1	20	2	西三荘、門真	—※	—※	—
2	2012.11.3~11.4	2	110	6	西三荘、門真、古川橋	2,000	18.2	500円***
3	2013.5.5~5.6	2	96	6	大和田、萱島、門真南	2,500	26.0	
4	2013.11.9~11.10	2	78	6		3,000	38.5	
5	2014.5.17~5.18	2	170	8	西三荘、門真、古川橋	3,500	20.6	
6	2014.11.6~11.11	6	167	8	大和田、萱島、門真南	2,500	15.0	
7	2015.10.15~10.20	6	173	8	大日、守口	2,000	11.6	
8	2016.11.10~11.14	5	142	8		2,000	14.1	
9	2018.5.7~7.7	62	45	6	西三荘、門真、古川橋	1,000	22.2	
10	2019.5.7~7.7	62	32	6	大和田、萱島、門真南	1,000	31.3	夜 1,000円

資料：「かどま元気バル」バルマップブックおよび聞き取りにより作成

※1回目はチケット制で販売枚数は400枚で1店当たりの販売枚数は20.0枚となる

***一部異なる料金設定あり

第2回は、現委員長のもと、同年11月3~4日に参加飲食店110店舗で開催された。開催エリアは上記2エリアに、古川橋・大和田・萱島・門真南の4エリアが加わり、計6エリアとなっている。この範囲での開催が第4回まで踏襲されている。第2回以降は、缶バッジ方式が採用されている。参加者は、缶バッジを500円で購入し、これが参加証とみなされ、バル参加店舗に行きワンコイン（500円）でバルメニューの提供を受けることができる。チケット制と異なり、何店舗でもはしごが可能である。缶バッジ販売数は回を重ねるごとに多くなっている。

第5回は2014年5月17~18日に参加飲食店170店舗で開催された。第5回から第8回まで、隣接する守口市の守口市エリアと大日エリア⁴⁾も参加し、開催エリア数が8エリアに増加する。また、第6回以降開催日数を増加させ、エリアによって開催日をずらして、参加者が多くの参加飲食店に行けるようにしている。この範囲での開催が第8回まで踏襲されている。第2回から第8回までのバルマップブックはA4版の冊子タイプである。第8回のそれは20ページからなり（写真1）、参加者がスタンプラリーをすることで8エリアの回遊を促す狙いが伺える（図3）。缶バッジ販売数は第5回の3,500個をピークとし、徐々に減少する傾向がみられる。

第8回から第9回にかけて、やや期間が開き、実行委員会では運営方法を検討している。短期間での開催のため、参加者が参加飲食店に集中し、参加者と参加飲食店と交流をもてるような状況にならないことが懸念事項としてあげられた。バルイベントは賑わいの創出が期待さ

れるものの、一方で参加飲食店としてはリピートしてもらえる参加者の来店も期待している。そこで実行委員会は運営方法を大幅に見直すこととなる。短期間での開催を見直し、第9回からは約2ヶ月間の開催とし、参加者により多くの参加飲食店に足を運んでもらうこととした。また、缶バッジ方式は変わらないものの、価格設定を、昼は500円のままとし、夜は1,000円とした。一方、このような運営方法にしたことから、約2ヶ月間の長丁場に参加しかねる飲食店もあり、参加飲食店舗数は減少し、開催エリアは門真市内の6エリアとなった。バルマップブックはB6版の冊子タイプで、より上質の紙を使ったものとした。第10回のそれは48ページからなり(写真2)、厚みのあるもので、「かどま元気バルBOOK」としている。本のまえがきにあたる部分では、バルイベントと平行してこれまで飲食店元気塾のメンバーが地産地消をテーマに取り組んできたことに触れつつ、参加者に向けて、「ご参加いただける皆様が地元を大切に思い、地産食材を通してきずなを結べば、私たちの故郷は、いつも元気で明るい町になる！それが、「かどま元気バルBOOK」に込めた、私たち「飲食店元気塾」のコンセプトです。」と記している。なお、缶バッジ販売数は半減しているものの、参加飲食店舗数も減少していることから、1店舗あたりに来

る参加者数は大きく減ってはいない。

「かどま元気バル」は、第8回から第9回にかけてバルイベント開催の目論見を、短期的な賑わいの創出から、地元の参加者が約2ヶ月間に繰り返し足を運んでもらうことに重点を置き変えた。直近2回の運営方法は、開催期間を長く設定することで、参加者の参加日が分散され、参加者の集中を回避しやすい状況にあったと考えられる。この経験が緊急事態宣言解除後直ぐのプレイベント開催につながる効果をもたらしたと考えられる。

2 2020年11月開催への準備とプレイベントの実施

(1) プレイベントの実施

当初は2020年10月に第11回かどま元気バルの開催が計画され、10月の本開催に向け、同年3月から、毎月テーマを変えて、プレイベントが計画された。COVID-19の影響から、本開催の時期は11月となり、緊急事態宣言によりプレイベントは店舗内での実施は自粛し、テイクアウトでの実施を余儀なくされてきた。

しかし、緊急事態宣言が解除された翌月の2020年6月には、プレイベントを実施している(写真3)。6月はワイン、7月は日本酒(写真4)、8月は焼酎をテーマとして実施している。飲食店元気塾のメンバーが取り組む地産地消のひとつである「ぼくらのワイン」「かどま酒」「門真れんこん焼酎」を提供する飲食店も参加している。



写真1 第8回のバルマップブック(古川橋エリア)

資料: 2016年11月12日筆者撮影



写真2 第10回のバルマップブック(門真エリア)

資料: 2019年7月2日筆者撮影



図3 第8回のスタンプラリー

資料: 第8回かどま元気バルマップブックから引用

(2) 2020年11月本開催へ向けた準備状況

2020年6月24日に、市内の飲食店に向け、11月の本開催への参加呼びかけがなされた。参加の要件には、メニュー内容は、原則1,000円(税込)で楽しめるお得なサービス・メニューの設定を求めている。また、テイクアウトメニューを必ず設定することも求めている。

くわえて、飲食店には参加にあたりCOVID-19感染拡大防止に関するガイドラインを定め、①店舗入り口には必ず消毒液の設置、②マスクの着用、検温の実施、③密閉空間をできるだけつくらないように、座席の間隔を広くする、換気のできる状態にしておくなど三密回避の取り組みへの協力、④飛沫感染を防ぐため、大声での接客や会話を控える、⑤大阪コロナ追跡システム⁵⁾の導入、店内でのQRコード付き案内資料の掲示、⑥COVID-19の状況により、テイクアウトのみでの実施の可能性、⑦その他(通常営業よりも細心の配慮、ガイドラインの適宜見直し等)の7項目を示し、①と⑤は必須事項としている。

【今後の課題】

2020年7月31日に11月の本開催での参加申込が締め切られ、32店から参加の意向が示された。2019年の第10回と同規模での開催が見込まれる。COVID-19の感染状況



写真3 6月プレイベントの企画であるワイン（西三荘エリア）

資料：2020年6月26日筆者撮影



写真4 7月プレイベントの企画である日本酒（門真エリア）

資料：2020年7月4日筆者撮影

は引き続き予断を許さない。今後も実行委員会による「かどま元気バル」の本開催に向けた準備、プレイベントの開催、本開催の実施状況を把握し、COVID-19の感染拡大防止に努めつつ地域の活性化を図る方策の確立に向けた取り組みを明らかにしていく。

【注】

- 1) 緊急事態宣言により感染者数は減少したものの、本稿執筆時の2020年8月3日現在、再度感染者数は増加傾向にある。2020年7月29日の定例会見において吉村洋文大阪府知事は、5人以上での飲み会の自粛を呼び掛けている。
- 2) 本報告は、COVID-19の感染拡大を望むものではないことを強調しておく。緊急事態宣言の期間、多くの飲食店が営業を自粛せざるを得ない状況となった。本報告は、COVID-19の感染拡大の防止を図りつつ地域を活性化させることを狙いとした活動を報告することで、他の地域での参考に資することに意義があるものとする。
- 3) 筆者は、同じ大阪府内でも例えば東大阪市のように同一市内の比較的距離的に近い3地域について、個々の地域的特性から異なる運営方法でバルイベントが実施されていることを把握しており(石原、2019)、これと比較して門真市内のバルイベントの運営方法は大きく異なる。
- 4) 守口市エリアは図2の守口市にあたる。大日エリアは図2の門真市の北側に位置し、大阪モノレールを利用して移動が可能である。
- 5) 大阪コロナ追跡システムは、感染者が発生した場合に感染者と接触した可能性のある人を追跡することができる大阪府が開発したシステムである。

【謝辞】

本研究を進めるにあたり、かどま元気バル実行委員会の井上健太郎委員長、中尾俊之前委員長に、ヒアリング等へのご対応をいただいた。記して感謝申し上げる。

【引用・参考文献】

- 長坂泰之他、2012、『100円商店街・バル・まちゼミ お店が儲かるまちづくり』、学芸出版社、pp.253
- 石原 肇、2019、東大阪市内3地域におけるバルイベントの運営方法の地域的特性、大阪産業大学論集 人文・社会科学編、37、95-116
- 大阪府府民文化部府政情報室広報広聴課広報グループ、2020、令和2年(2020年)7月29日 知事記者会見内容 (<http://www.pref.osaka.lg.jp/koho/kaiken2/20200729.html>)
- 大阪府スマートシティ戦略部地域戦略・特区推進課事業推進グループ、2020、大阪コロナ追跡システムについて (http://www.pref.osaka.lg.jp/smart_somu/osaka_covid19/index.html)